

晝めしをたべてから退屈になつたので三味線を引いた。

湯に入つた。

それから新吉は階下で、鏡の前に坐つて、コシマ・キヨと二人でお化粧を初めた。

クリームや、紅白粉や水白粉で以て、色々にして笑ひ興じた。

コシマ・キヨはまだ子供を生まない前で、多分に茶目なので、新吉の眉に墨を塗つたりして喜んでゐるのだ。

『羽左右門に似て來たわ』などと言つた。

見知らない青年が、午後三時過ぎに一人、辻潤の宅へやつて來た。

加藤一夫の使ひだとか言つて現金を持つてゐる。

岡山と神戸で講演をやるのだと言ふ。

『其の旅費として二十圓、行つて貰へるならお渡しするのです、今晚の六時の急行で中央停車場で待ち合はす事になつてゐます』と言ふ。

『誰々がやるのか、俺は行かれぬいぜ、可厭だよ』辻潤は言つた。